
Minerva・Books

川崎 鉄馬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M i n e r v a ・ B o o k s

【Nコード】

N 2 8 0 3 G

【作者名】

川崎 鉄馬

【あらすじ】

主人公はある一冊の本を見つける。そこには現代科学を超越した神器の製作手順が書かれてあった。自分のあり方を見つける者たちの話。現在大幅改定中につき更新ストップ。仕上がりは四月ごろです

日常

あとがき

科学とは何だろうか？

ある者に問えば

世界を平和へと導くものであると応え、

またある者に問えば

世を統べ、人を統べることの出来る絶対的な力と応え、

また違うものに問えば

人を惑わす忌々しい力だと応える。

先のほかにも様々な意見が出るだろうがその実、科学とは

普遍的でありながら常に変化を齎す一つの真理にしかすぎない。

と私は断定する。

すなわち、どのように真理を行使するもその生物の手にゆだねられるのだ。

が、これもまた偽なる答えかもしれない。

だからこそ、あなたはこの一つの物語しんりを読み

何に気づいただろう。何を思ったのだろう。

私は無性に興味が湧いて仕方がないのである。

書名：《真理》

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXβ

騒々しい声が教室中を木霊する中、本を閉じる音が微かに響いた。

閉じた本先には、瞳を閉じた端正な顔立ちの青年が佇んでいた。青年は、あわい栗色の髪をしているが、ところどころに黒髪が見られることから先天的な茶髪である事が分かる。黒の学ランを着ているので、学生と思われるが、その身に纏う空気は秋風の如く冷たく、静かである。

すると、青年は落ち着いた声で呟いた。

「くだらん」

そして地上でのんびりと住む草食動物を空から一瞬して八つ裂きにし、その魂の一片おも捕食する鷹のような鋭い瞳を開眼し、横にいた青年に向けた。

視線の先には頭髮を燃え盛る竜の息吹のように赤々と染色し、服装は赤の生地に髑髏がデカデカとプリントされたシャツ、下は黒の学生ズボンを履き

様々なアクセサリーを腰に下げた青年がいた。

「まあ、んなこと言うなや。折角、親父の書いた本やねんからサー」
自分の父を庇うかと思いきやその発言には嘲笑が紛れていた。形だけ庇っておいてやろうという心が垣間見える。

「一通り目を通して見たが、日本の治安体制に対する批判やら海外の軍における軍事力の推奨やら。極めつけに自衛隊の志願書まで同封しているとは・・・ああいかわらずだな、提督殿は」

呆れと冷笑を含んだ笑みで鷹目の青年は本に掲載されてある写真を眺めた。

そこには黒いあごひげを蓄えた筋骨隆々な坊主の男性がうつっていた。さらにその下には草書体で重々しく達筆に書かれた漢字が。

日本国自衛隊提督『竜野 爪拳』
たつの そつけん

「相変わらずなんはおまえんとこの親父かてそうやろ？文部科学大臣の癖して教育上よろしくないことばかりしてはるやんか。そこんとこ息子としてどないでつか？創屋さん？」
そつけん

猫なで声の彼にそう呼ばれた青年は怪訝そうな顔をあらわにし、鼻で笑って一瞥した。

すると突然、女性の声が彼らの前方にある教卓側から静かに叫ばれた。

「竜野^{たつの} 伊吹君^{いぶき}、機栗^{きくり} 創屋君^{そうちや}、静かにしましょうねえ」

その口調はまるで幼稚園児をあやすかのようである。

滝のように汗を流した二人は錆びれたブリキのロボットのようになり、ちらへ首をまわすと、そこには頭髪をボブカットにし、身長180センチ程度でジャージをきた美しい女性が背後に夜叉を構えながらほほえんでいた。

「あ、愛先生^{あい}いつものまにおつたん？」

「さっきからいたわよ？あなた達だけが話に夢中で気付かなかったから注意したの。そんなことより伊吹君。いつもいつてるけどその服装何？先生の言うこときいてくれないと怒っちゃうぞっ」

語尾にハートマークが付きそうなほどの愛らしい声だが、目が笑っていないので怒り心頭なことがわかる。

「さて、それでは今日の授業は――」

X
X
X X

その後、彼らは自らの運命に逆らえぬことを自覚する。

一冊の本に巡り合うことで。

運命との邂逅 (meet)

「はい、今日の授業は終わり！！ 帰って各自で勉強してね」

年齢30の高校教師とは到底言い難いテンションの挨拶でホームルームは終わりを告げた。声の中に微量に含まれている殺気がこのクラスの大半を強制的に自主学習するように仕向けてさせているのは言うまでもない。そのせいでこのクラスは一般高校の偏差値を軽く超える成績を維持しており、それがこの高校の売りにもなっているわけだ。が、生徒達にとっては日常的にこの忌々（まがまが）しい殺気と対峙しなければならぬのでたまったものではない。

「創屋あゝ、この後ゲーセン行かへん？ 自主勉なんかかったるやろく？」

ある不良、竜野伊吹たつの いぶきのような例外もいるが。

「……生憎、俺はそんなに暇じゃない」

と言っている創屋そつやの瞳はどことなくキラキラと輝いているようにも見える。いやそればかりか機械のように無機質で淡々とした口調もごく僅かだが、人間らしさが現れている。まるで好きな玩具を今か今かと待ち続ける子供のようでもある。

「んなこと言つてまゝた屍爺しかじいんとこ行くんやろ？」

屍爺とは彼らの住む街にある有名なボロボロ古本屋『巖流道がんりゅうどう』の店主の事である。屍爺という名の通り骨と皮しかないような口数も少ない人なので有名なのだがそれよりも店に陳列してある本が大体、

昭和の年号しか付いていないというなんともレトロなことでも有名な店である。が、中には本当に面白い本や素晴らしい本を何冊か屍爺は所持しているらしく、お眼鏡に叶った者だけ販売を許されるらしい。その選ばれし一人がこの機栗創屋である。

「じゃあな」

端的に挨拶を済ませ、そそくさと創屋は走り去った。その速さたるや毎回体育の50メートル走で10秒代しか出していない奴かどうか見紛う程の速さとキレのあるフォームだったらしい。と機栗創屋帰宅目撃者は語る。

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

件の古本屋にあと数メートルばかりかと創屋が差し掛かったとき、彼と向かい側の路地からひとりの美しい少女が現れた。

その髪はまるで真夜中の夜空のように黒々とした美しい髪であり腰にまで伸ばしている。

体軀は至極しなやかで悠然と歩く様はさながら黒猫を彷彿とさせる。顔は天使というよりはまるで墮天使のような妖艶とした見るものを惹きつけ惑わせる魅力を秘めている。

瞳、眼差しは夜空に孤高と輝き地上の者には畏怖と畏敬の念を抱かせる神秘の象徴、月を思い起こさせる程、美しかった。

総体的にこれを纏め、この人を一言で表すならば――『闇夜』といえるだろう。

「あら、創屋君。奇遇ね」

その声はラヴェル作曲ノ『水の戯れ』が似合う。水の精霊が澄んだ湖の上で舞い踊っているかのごとく繊細で美しい声だからだ。

彼女の名前は神威^{かみい}恍美^{こうみ}。創屋らと同じ高校、学年に通っている。その美貌から生徒や教師陣から熱烈かつ宗教的なファンクラブまで結成されているらしい。彼女自身はそのファンクラブの存在を知ってはいるのだがまるで存在していないかのように無視している。彼女曰わく「気にして何か私に特があるの？」とのこと。この二ヒルな部分も彼女の人気に拍車をかけている要因の一つでもある。

「あなたもここの利用者だったんですね、ちよつと意外です」

「何それ？まるで私に学がないとでもいいいたげね。私に学が無かつたら貴方もそうでしょ？ 万年同立一位さん？」

一般高校の偏差値を超えるクラスのトップに君臨するのが創屋そして恍美の二名。たかだか一般高校の偏差値を超えているだけと思っている者がいればそれは大きな間違いである。すでにこの両名は某有名大学からの推薦枠をすでに用意されているらしい。恍美に至ってはアメリカからも推薦状が上がっているらしい。高校一年生であるにも関わらずだ。であるならばなぜこのような普通の高校に入学したのかという疑問が付きまとうがそれは各々理由があつてのことと周りも強制的に納得しており、ノ（創屋らの担任が圧力をかけているのが主とした原因）理由を知るのは担任、家族、本人のみである。

「いえ、ただ貴女ほど知識に富んだ方が読書をする必要があるのかと思ひまして」

「創屋君？知識という物はいくら学んでも学んでも学び足りないものであり、人間という物は即ち幾つになっても無知なものよ？」

しぐさ
情景
があ

が、話しているうちに店内へと足を踏み入れたことで好奇心一杯の面持ちへと切り替えた。

店内には所狭しと本がその役目を果たさずに何年も棚に収まつたままのものが殆ど。いやそればかりか店内そのものが何年も人が踏み入れられていないように薄暗く不気味。天井の隅に蜘蛛の巣が張つてあるのが一層、それを引き立たせている。

「なにかお探しか？」

店のボロさ……もとい伝統を確かめっているとふと奥のカウンターから老人の声がした。

見ると骸骨が椅子に鎮座しているようだがその実、ここの店主の宮みやもとさのすけ本佐野助である。

「本を頼む」

創屋がそう一言告げると、店主はすぐ背後にある扉へと消えていった。そうして待つこと数十分。顔が見えない位にまで渦堆く積まれた本の束をよろけながら持ってきた。

「最近、入荷したのは……え、と……」

たどたどしく伝えられた本はどれもレプリカかもしれないが、盗品では？と思わざる負えないほどの貴書や奇書の数々だった。様々な機械を生み出したエジソンだが、その生涯を閉じる際に友に託したとされる、発明品の図面を纏めた奇書やアインシュタインの直筆で書かれ

た相対性理論についての本など、マニアには喉から手が出るほど欲しい物ばかりだった。

「あゝ、あとは最後にこれ」

そう言つて店主が取り出したのは分厚い本。表紙などには一切の書名や著者名は記載されておらずただ青く太いラインが表紙の中央に引かれてあるだけ。さらにページを開こうにも１ページずつ糊付けしてあるのか微動だにしないのである。刃物で無理やりに切れれば内容を知れるかもしれないが、もしかしたら中には有名な画家が残した秘密の逸品かもしれない。詩集や論文かという期待があり、美術的価値が無くなってしまうことを恐れて一向に中身を把握できないでいる。と途切れ途切れに店主は説明した。

今年で１０８歳になるというから驚嘆に値する。

「これ以外、選んどくれ」

店主はその本を横にあるキャスターのついた可動式テーブルの上に置いた。紙が重なり合う事で生み出される重みが静かな店内に響いた。

「何故それ以外なんだ？」

この問いにはさしもの店主もその虚ろな目を大きく見開いた。

「こんな本が欲しいんか？」

「ああ。中身が気になるからな」

店主に訝しげに睨まれつつも創屋の目には好奇心という色、一色に

染まっている。

「その肝心の中身をどうやって知るの？」

創屋が店主から本を手渡されようとしているのを横目に恍美は何故かその表情に微笑みを湛えている。

「んゝ、それについては家に帰ってじっくり考えてみる。それはそうと代金いくらだ？」

「タダでいいよ。中身が分からのじゃ値打ちのつきようがない」

それはありがたいと一言告げると創屋はその本を大事そうに受け取った。

すると

「痛い
痛っ」

創屋の指先から少量の血液が流れ、青いラインの上に滴った。

「なんだ？」

創屋が疑問を抱き、すぐさま表紙を見つめると青いライン上に

赤い、真紅の文字で

『女神の知梟』
じょしん ちねのちぶくろう

と記されてあった。

運命との邂逅 (meet) (後書き)

中学の卒業式や高校の入学手続きなどでこの二、三週間ろくに投稿しなかったこと誠に申し訳ありません。

以後、一週間に一話から二話のペースで書かせていただきますのよろしくお願いします。

まだまだ新米ですので長い目で見てくださることをお願いいたします。

古書の中 (inside)

真紅の文字が創屋自身の血によって書かれたものだ気づくのに、時間は掛からなかった。正直、文字が急に浮き出たことに驚きを隠せない様子。

だが、店主が様子を伺おうとしたので、表表紙を隠した。おもて

生きる屍と形容しても差し支えないほどに、この店主は痩せほせ、時々自分の名前さえ思い出せないほどボケている。が、こと本や人においてはその目利きは一流であり、バカな奴らに貴重な本を販売する時には、ふざけた値段を執拗にふっかけて店に二度とこないようにする。逆に賢い者として認定されればそれを無料、もしくは驚愕の安値で買うことができるが、それでも、ごく稀にお眼鏡にかなった者でさえも店主自身が気に入った本は売ってくれないことがある。要するにワガママな、爺おじいなのだ。

文字の浮き出るこの本など格好の餌食になるに違いない。

一瞬でそう、断定した創屋はそくさと恍美をほったらかして帰っていった。

何故か、ほったらかしにされた恍美は啞然としているわけでもなく、ただただ創屋の走り去った方向を眺め、僅かに微笑んでいるようだった。

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

外壁が黒の木目調という、一風変わった家。全体的に和風を基調とした平屋造りのデザインだが、屋根裏部屋も含め、三階建てとなっている。敷地面積は200坪と大きく、庭園はこれまた純和風で、池に鯉と桟橋がある。

玄関を入り、真っ先に来るのがリビング。見渡してみると、床は

フローリング、部屋の中央には囲炉裏がある。部屋の左側は全面障子となっており、その向こうは縁側と先程の庭になっている。リビングの奥には10畳のダイニングキッチンと横に併設された階段があるだけ。随分と質素な造りである。

創屋は階段を登り、二階の自室へと転がり込んだ。室内は一階と同じ造りだが、こちらは全体的に黒と白色系統の家具でスタイリッシュにまとめられている。膨大な量の機械類、機材の山があることを除けば。

創屋は機械に目もくれず、一息つくために珈琲を煎れた。

「さてと……」

創屋は、帰宅するまでにある事に気付いた。本が開けるようになっていたのだ。

気付いた時、すぐさま本の中身を知りたい衝動に駆られたが、楽しみを取っておくために今まで我慢していた。

何故なら……。

「楽しみはとっておくほどにその甘みを増す」

そして今まさに、その本を開こうとした時だった。部屋全体に間の抜けたインターホンの音が響き渡った。誰か客がきたらしい。

こんな時に、と少々苛つきつつも自室のモニターに向かった。利便性を考えて、創屋が親に無断で取り付けたのだ。

「誰だ……って、神崎か。何のようだナルシスト」

「やだなあ、何だとはなんだい？ この僕が直々に出向いてやったんじゃないか。まあナルシストな事は認めるけどさ、なんつたって

「この美し」

「黙れ」

今の彼は、その鋭い鷹眼に加えて、苛々が募っている。その氣迫に押し黙らないのはもはや、神ぐらいの者ではないかと思う程だ。

この長つたらしいセリフを吐くナルシストの男。名を神崎陽。かんざきのほる自分と言う割に、なかなか端正な顔立ちの優男だが、一般的には上の下程。唯一自慢できるとすれば、その艶やかなウェーブのかかった肩ほどもで伸ばした黒髪と、父が太陽光発電の世界ナンバー1のシェアを誇る、会社の社長であるぐらいか。ちなみに創屋とは小学校、中学校と同じクラスだった幼なじみ兼親友である。

「で、何のようだ。超絶微妙なイケメン君」

「超絶微妙で悪かったね！！　せつかく、新製品の太陽光パネルをパパから貰ってきたのに……」

「！！　なんだ、そういうことか。まあ上がれ、超絶そこそこなイケメン君」

「だから超絶そこそこは余計な」

「上がれ」

問答無用の一言により、強制的に神崎は家に入らされてきた。上がってくる際に、散々機械オタクやら目つきが不良やら、悪態をつけていた。勿論、それは彼のみぞ知る、と思われた。だが。

「誰が、機械オタクの不良だ」

「ヒッ！！ 君ってエスパーかい！？」

ドアを開けたと同時に言われたので、ビックリしてしまった。涙目で後ずさるのも領けよう。

「そんなんじゃない。家の至る所にカメラと音声録音機能のレコーダーが仕込まれてるだけだ」

「何故に…… ってああ、防犯か」

創屋の父である、機栗椰子きぐりやしき貴は文部科学大臣である。自ずとゴジック専門のどこぞの金曜日記者やらが集まってくるわけで、中には家にまで入ってくるやつまでいる。なので、こういった防犯対策がなされているわけである。

「正にカラクリ屋敷だね」

「下らんジョークよりパネルを早くよこせ」

神崎は渋々といった様子で、オレンジ色のユニクロ製斜め掛けリュックから小型のシートを取り出し、手渡した。

「新製品のアポロンニウムさ。従来の製品に比べて各段に光エネルギー収集率が向上、電気エネルギー変換率も95パーセント。さらに」

「送電に至っては電磁波に変換してってところか」

神崎は目を見開いた。そうだろう。何故なら一見するとこのパネル、ただの下敷きにしか見えないのだ。

「よくわかったね。普通説明されなければ分からないよ?」

「ん、そうか? 意外と分かりやすい構造だからすぐ理解できそう
だぞ?」

新しい玩具を買って貰った子供のように目を輝かして、様々な角度からアポロニウムを眺めている創屋。その表情に、神崎もどことなく、父が我が子を見守るような暖かい面持ちとなっている。

「それより、創屋? その古ぼけた本って佐野介さん所で買ったの
?」

「ん? なんだ? 何か言ったか?」

シートに集中していたようで話を聞いていなかった様子の創屋。神崎は少々、呆れつつも赤子を窘めるような口調で再度言った。

「だから、コレだよ。コレ」

神崎が手を伸ばし、本に触れた。その瞬間、ひとりでに本のページがめくられて行く。創屋も変化に気づいたのか「ん?」と間の抜けた声を出しつつ向いた。神崎はというと、いきなりそういった現象が起こった為、驚いて飛び退こうとした。が、運悪くページで手を切ってしまった。血の滴が本の上を飛来する。

「あつ」

すると、どうだろう。中間部程で見開いたままその現象が収まった。タイミングが良いのか悪いのか、滴が本に着地した。その時、創屋の頭から何かが切れたような音がした。

「おい、脳天気ナルシスト君？　これはどういう……」

「違う！！　僕じゃない！！　本がひとりでにー！！」

「そんなこと、あるわけないだろうー！！」

創屋は手元にあつたハリセンで神崎の頭を叩いた。何故そんなものがそこにあるのかは謎である。

「いつつ……。剣道二段の奴がする事かい、全く……」

「じゃかあしい！！　そこで正座でもしてろ！！　せつかくタダで手に入れた本なのに……」

ブツブツ文句を垂れながら本をのぞき込む創屋。だがページを見た瞬間、彼の呟きは止まった。

「なんだ、これは……」

神崎は疑問に思ったのか、本を覗き込んだ。そこには何の変哲もない白紙。見たところで何かなにやらからない、といった様子だ。

「白紙がどうかしたのかい？」

「白紙？　お前こそ、どうしたもこうしたも、この図面が分からないのか。お前の目は節穴か？」

一瞬で双方の頭の中は疑問符で埋め尽くされた。実際に図面はここにあるのだ。寸法までくつきりかつきり見えている。

「僕には見ないけどな……あ、でもそこなんかは見えるよ」

神崎が指を指した先には

世界の論理【ロジック】

と血文字で描かれてあった。

古書の中 (inside) (後書き)

長きにわたってやすんでいて本当に申し訳ありません!! いや、弁解とこういうわけではないんですが、作が実は卓球部と剣道部の掛け持ちでしっ (竹刀によるリンチ

あはは、まあそういうことですんで、何卒これからも読んでくださいね!! 感想マツトるで!!

悲愴なる宣告 (PRONOUNCE) (前書き)

毎度お馴染み、正に fly joker の名がふさわしい不定期更新
新噓つきフラフラ野郎です。

誤字脱字等ありましたら、ご連絡下さいませ。

悲愴なる宣告 (PRONOUNCE)

「む、そこしか見えないのか……？」

創屋は更に疑問を募らせたのか眉間のしわを更に深めた。特定人物だけにしか見えない文字など実に非科学的、と思っていることだろう。

「うん、見えないね。創屋にはどう見えるの？」

陽はさもそれが当然だと言つような口調で告げた。その反応に創屋は、口をへの字に曲げる。

「だから、さつきも言ったが図面だ。こんなにぎつしりと書かれて……！！」

陽に説明するために、本に眼を落とした創屋。だが、その瞬間、体を石のように固まらせた。陽はその反応に眉をひそめている。

「どうし」

「えない」

「え？」

陽の質問を創屋は遮った。だが、その声は蚊の鳴くように小さくとても聞き取れなかった。

「有り得ない」

やっと聞こえたかと思えば今度は文脈に主語が無い。そんなもどかしい状況に少々嫌気がさしたらしく、陽は口調を強めて言った。

「だから何が？」

「ん？ ああ、すまん。余りにこの本が凄くてな。聞いていなかった。で、なんだ？」

陽は呆れてため息を一つついた。昔から創屋は異常なまでの集中力がある。例えば、中学の時など、図書館で本を読んでいたら、どこぞの生徒が調理室で火事を起こし、警報が鳴って大騒ぎになったにも関わらず、彼だけは気付かずに危うく取り残される所だったのだ。

創屋の事は熟知しているが、この性格にはやっぱり呆れるな。と陽は率直に思った。

「その本のどこがどうすごいんだい？ 白紙にしか見えないけど」

満面の笑みで、しかし内面は激しい苛立ちの感情で創屋に語りかけた。付き合いが長いせいで、創屋には陽が怒っているとすぐさま直感できたらしく、いきなりの怒りの反応に冷や汗を流している。

「こ、この本なんだが現代科学では計りえない公式、技術、現象が描かれているんだ」

陽は耳を疑った。仮にも現代科学の最先端に行く会社の跡取りだ。その技術を超える技術があるなど、今までの父の努力をあざ笑うかのようで実に腹立たしい限り。その怪訝な様子を察したのか創屋は更に続ける。

「説明するよりも実物を見た方がいいだろう。二週間後にまた家に来てくれ。ああ、アポロンニウムは置いていってくれ。この世界の論理【ロジック】を作るのに必要だ」

「作るって……現代科学以上の技術をお持ちなんだろう？ その本は無理じゃないのか？」

至極当然な言い分だったと陽は胸を張って言える。現代科学を超越したものを現代の技術で作るなど矛盾も良いところだ。だが、創屋は鼻で笑い飛ばした。

「じゃあ、お前はこの本が未来の奴が作った本とでも？ 残念ながら答えは否だ。お前は見えていないだろうが、用いられている電気図記号が数年前に廃止になったものが多々見られるんだ。そこから考えてもこの本は過去、10年から20年の本と予想される。そして、どこの天才が作ったかは代物かは知らんが、ここまで詳しく記録が書かれてるんだ。試作品の一つや二つ成功しているはずだ。まあ、何故試作品を作れているにも関わらず、世に発表されていないのかは不明だが、過去の技術でできて現代の技術でできないわけではない」

一息に纏めた論理展開。殆ど、隙のない論理構造にこちらとしてはため息をつくほか無いだろう。

「しかし、それにしても現代科学を超越なんて言い過ぎじゃないのか？ 実際作れるんだろ？」

「いや、すまん。語弊があったな。確かに現代科学を超越していると言っても過言ではないんだよ。見たことのない公式やプログラム

が多いし、実際、信じられない現象がかいてある。だから作れるとは思うが完全には分かん」

「……まあ、いいさ。兎に角、作れるなら作ってくれ。僕も一応、科学者の卵だからね」

創屋はそれに頷くとすぐさま本に目を落とした。ブツブツと独り言を吐く様は少しばかり異様だが、彼が極度の集中に陥るといつもこうなる。陽もそれを理解しており、この世界の論理「ロジック」が起こせる現象とはどういうものか、父親が経営する会社で作ってみようかと聞こうとしたが、やめた。その方がこの先におもしろそうな未来が待っていると感じたからだ。神崎はそう、一人ごちて創屋の集中力を削がぬよう、静かに機栗家を後にした。

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXβXXXX

多くのビルが密集する都会。昼とは違い、夜の街独特のモダンな雰囲気がある。昼には太陽の光を浴びて、燦々と輝いていた窓ガラスも夜には闇を吸収し、街を写す漆黒の鏡と化していたり、はたまた光の塔と化していた。その中にある、群を抜いて光り輝き、高くそびえ立ったビルの玄関に一人。軽くウェーブの掛かった髪を肩まで伸ばした男が立っていた。

「いつみても素晴らしい」

神崎陽だ。その光輝くビルをうっとり見つめている。

そして社名が彫刻されてある大理石の看板へと目を移した。

“KANZAKI solar energy company”

神崎の父である、神崎照^{かんざきてる}が設立した一大企業である。太陽から抽出した光エネルギー利用を軸にした商いを行っており、今や世界のKANZAKIとしてその名を知らぬものは居ないほどだ。このビルはまさしくそれを表しているかのようで、今光輝いているのも昼に吸収した光エネルギーを利用した結果である。その技術は他の追随を許さず、電気エネルギー変換率がなんと95%であり、発電所を必要としない世界初の完全自立型企業としても有名である。

陽は玄関脇に立っていき警備員に挨拶をし、ロビーへと入っていった。顔馴染みなのか警備員も微笑みながら挨拶をした。玄関口を入ると仕事をしているらしい者は残り数人で、その歩調もゆっくりとしていることからもうすぐ社員全員が帰宅するであろうことが分かった。神崎に気付いた者は挨拶を笑顔で済ませて自らの部署へと戻っていった。

受付嬢に顔パスで最上階への入出許可を申請し、エレベーターで向かった。

最上階には部屋が二つしかない。一つは社長室。事務関係など社員での決定事項に最終の判断を下したり、その日のスケジュールを確認する場である。だが、あまりこの部屋は使用しておらず常時、もう一つの、照と照が許可した者しか入室が許されない作業場に彼はある。そして自らの制作意欲を満たすために日夜、発明品作りに勤しんでいる。この日も作業場にいるだろうと予想した陽はエレベーターを降り、左に曲がった。通路を五メートルばかり進んだ所にある作業場のドアをノックをし、開けた。親子関係でも勤務中は公私混同せず礼儀を弁えるという決めごとの為である。

部屋には様々な機械や工具が綺麗に整頓され部屋を埋め尽くしていた。そこは創屋の部屋と同じだが、創屋の部屋がモノトーンカラ

ーで統一されていたのに対して、此方はスカイブルーやオレンジと言った暖色系のカラフルで可愛い部屋だ。その部屋の中央に一人、背丈の高く見るからに体つきの良い男性が機械をチューニングしていた。体つきがわかったのは白のYシャツの袖とベージュのズボンを捲って見えた腕、脚からだ。鍛え抜かれたその四肢はプロの水泳選手やボクサーにも引けを取らない様な締まり方である。男は扉が開閉する音に気づいたらしく、チューニングする手を止めた。そして陽へとその眼差しを向け口を開けた。

「やあ、我が愛しい息子よ。今日も今日とて美しさは太陽のように美しく眩しい私にはまだまだのようだねえ」

「こんばんは、美しい父さん。繰る日も繰る日も、僕の美貌は輝きをますばかりのようで。僕がその若さ故にお父様の煌めきを越すのもそう遠くないでしょうね」

「なっ。いやいやまだ私の方が――」

後、10分程この美貌自慢は続いた。陽以上にナルシストと自己主張の激しいこの男こそ神崎照、その人である。陽よりは端正な顔立ちで上の中程度である。髪は同様によく手入れをされており、今は作業に支障がでないよう後ろで束ねている。陽が後、20年成長したような容姿である。

美貌自慢の結末は毎度お馴染みで双方ともに究極の美であると位置づけられた。全くもってここまでくると勘違いも華々しいな、と創屋は以前この光景を見たとき語ったとか語らなかったとか。

「それよりも創屋君はどうだった？ アポロンニウムを喜んでくれたかね」

「それはもう純真無垢に瞳を輝かしていましたよ」

それはなによりだと目元の皺を深めた。照も何かと機栗家とは縁がある。昔から創屋の世話をしており、例えるならもう一人の息子と呼んでも良いぐらい、仲睦まじかった。

「それはそうと、創屋が佐野助さんから面白い本を貰ったようで。僕には白紙にしか見えなかったんですが、なんでも現代科学を超越した機械の図面が書かれ」

「何？」

陽は押し黙った。否、思わず黙ってしまった。照の声、様子が生まれてこの方見たことがないほどに暗く、冷たいモノへと変わったからだ。怖い、陽は率直にそれ感じた。

だが、何のことはない。

「それは本当か？ 内容は聞いたか？」

「え、ええ。全部は知りませんが、世界の論理と書いてロジックと読む機械があるのは分かります。二週間後には受け取りに行く予定ですが……父さん？ 如何なさったのですか？」

照は少し俯いた後、より冷血な面持ちで陽を見据えた。いや、その眼差しには何かしらの決意の色を湛えているように力強い。

「今まで黙っていたが、実はな。機栗^{きくり} 椰子貴^{やんぎ}に向日葵は殺されたんだ」

向日葵。それは他でもない、神崎陽の母の名だった。

今日この瞬間を境に、ある方程式の一部分として神崎陽が活動
を始めたと言ってもよい。

殺戮と裏切りに染まった死の方程式に。

悲愴なる宣告（PRONOUNCE）（後書き）

因みに現在、伊吹は街中で不良と死闘を繰り広げていたりいなかったり。

愛憎の叫び (SHOUT)

陽は絶句した。

今、目の前にいる父親^{やっ}は一体何を言っている？ 何故今、そんな事を言う？

照の発言に理解が出来ないのでなく、したくないと素直に思った。が、心とは裏腹に体は冷や汗でぐったりとし、今の照の発言を明確に肯定しているようである。その行動が、親友を信じる事が出来ない醜い愚か者であると決められたような気がしてならず無性に腹が立った。だが、それよりもまずあることが陽を反論に駆り立てた。

「な、何てことを言うんですか父さん！！ 創屋の父君は昔のお仲間なのでしょ？」

照と創屋の父、椰子貴は20年来の友人関係、いや親友関係にあると陽は昔から聞かされてきた。創屋と出会ったのもこの二人がきっかけと言っても過言ではない。椰子貴と話す照は生き生きとしていたのを幾度となく陽も見ている。

が、照は口元を歪めて、心底嘲るように語った。

「ハッ。仲間？ あれが仲間というなら世界の人々は一人残らず私の家族だよ」

信じられない。否、理解が追いつかない。太陽のように煌びやかで爽やかな笑顔を絶やしていなかった人が、ここまで人をおもしろ可笑しく愉しそうに嘲ることが出来ることに。陽は今すぐ回れ右してこの場から立ち去りたかった。いや、そればかりかこれが出来の

悪い悪夢であることを信じもしない神様に向かって切に祈ってさえいた。

しかし、祈りも虚しく聞こえたのは照の深呼吸する声のみ。

「さて何故向日葵が死んだか、だが」

声が酷く空虚なもののように中身がない。淡々と語る口調には最早、基の照の姿は無い。

「椰子貴と私が昔からの知人であることは知っているね？ 向日葵も含めた僕らはね素晴らしく優秀な科学者に仕えていたんだ。それはそれは素晴らしい方で、この僕でさえあの人の横にいただけでその存在感が色褪せてくすんでしまったよ。そんな中、椰子貴と向日葵はね、唯一あの方のお眼鏡にかなっていたんだ」

遠い日を思い出しているのかその目は虚ろ。そして、ふっと優しく微笑み、心底楽しそうに語り出した。

「あの頃は良かったよ。他にも何人が助手がいてね？ お互いに切磋琢磨し、ライバルとして友達として至極ともいえる日々を送っていたんだ」

話終えた瞬間、照から全ての表情が消えた。人間の皮を被った人形のごとく。先ほどの話から内面に暗く陰湿な感情がある事は予想できる。が、やはりその憎悪の感情は感じることもさえ出来ない。あまりの深い憎悪に感情のメーターが振り切れ、反応しなくなった秤のように。いや、そもそも常人には理解することさえ不可能なのかもしれない。

彼がどれだけ友を、彼女を愛していたのか。故にどこまで椰子貴

を憎んだのか。

「だが彼はそんな最高の日々を叩き壊した。その頃まだ婚約者だった向日葵を殺し、瑞光なるあの方まで殺害した。その際、知識を根こそぎ絞り出し、一冊の本に纏め上げたんだ。名は――」

ミネルヴァのフクロウ
「女神之知梟」

陽は照の発言を遮って声に出していた。見覚えがあったからだ。照は自分の推測が正しかったことを確信したらしく、静かに頷いた。

「彼が殺したという証拠はない。だが、我々他の助手が殺害に気付いた時からすでに彼の姿はなかった。故に確信した。アイツが殺したのだと。……私は決して許さない。必ず追いつめてやる」

「……父さん」

陽の呟きに頷く様は不適で冷酷な彼ではなく、神崎陽の父親である神崎照そのものであるといえる程、暖かみに溢れていた。言葉を会さずともそれだけで分かるように。

「陽、その為にはその本が必要なんだ。その本さえあれば母さんも……もしかしたら、生き返るかもしれないんだっ!!」

人を生き返らせる。それはおおそ不可能な事だ。分かっている。分かっているにも関わらず、体中を鋭利な刃物で八つ裂きにされたような苦痛に歪んだ父の顔を目の前に、陽にとって、信じないという事こそが不可能であった。

陽はそれだけを聞くと部屋から出て行った。父の決意を胸に秘め

て。

「陽……」

その瞳に何を写すか。彼が今、何を思い、何を考えているのか。疑問符が部屋の中を満たした中で、彼の言葉は儚く部屋に波紋を残すばかりである。

想いの矛先（PEARHEAD）（前書き）

長らくお待ちいたしました。いよいよバトル突入です。ここまで五話も使うとは……。人生予想外なことがつきものですね。

想いの矛先（PEARHEAD）

創屋は黙考していた。この世界の論理【ロジック】という代物は、調べれば調べるほど複雑で難解である。故にこれを解読すれば、ノーベル賞を受賞することなど目じやない。いや、そんなものではない。これさえあれば国家を転覆させることさえ可能、といえる程の力を秘めているとさえいえる。これを製作した科学者とはいったい――

「創屋、早くあれを見してくれよ」

思考はナルシストの揺さぶりでかき消された。本当に鬱陶^{うつとう}しい限りだ。

「わかったから肩を持って揺さぶるな、もはや天然記念物並に貧弱なナルシスト君」

「なんか前より酷くなってないかい!？」

陽の糾弾を完全に無視して、創屋は背後から半透明のルービックキューブを取り出した。ルービックキューブは曇った窓から燦々と降り注ぐ陽光を、各々六色もの面から反射し、屈折し、そこから織りなす光で部屋に数え切れない色のダンスを繰り広げている。

創屋等が約束をしてから三週間が経過していた。予定していたよりも一週間遅くなったのには何かしら、難解な点が多くあり、故に手間取ったからだと創屋は説明した。

「……これが、世界の論理【ロジック】？ だだのルービックキューブじゃないか」

「いや、ルービックキューブではない」

陽は訝しむように眉間にしわを寄せた。どこからどうみてもルービックキューブにしか見えないのだ。当たり前前の反応といえよう。創屋はその様子を心底楽しんでいた。例えるならば新しく買ったおもちゃを見せびらかす心境に近い。

「？ どういうことだい？」

「さあて。どういうことだろうな？」

ニヤニヤと終始笑っている創屋に苛立ったのか、陽は身近にあったハサミで世界の論理【ロジック】を破壊する態勢に入った。創屋も思わず、ニヤニヤ顔を崩し、この世の終わりでも来るかのように慌て出した。

「お、おい！！ いきなりどうした！！ わかったから、ハサミを返せっ！！」

「嫌だね。今の顔は流石に僕の憤怒の琴線に触れたよ」

「む、本気の声色じゃないか」

創屋は世界の論理【ロジック】を手にとり、赤色の面をハサミの方へ翳し、絶対的力を行使した。

「ならば、その身を持って体験させてやる。“溶解”(solution)せよ」

命じたと同時にルービックキューブもとい世界の論理【ロジック】から光線が放たれた。その光線に赤々と照らされたハサミは、瞬間的にそれそのものが赤みを帯びていった。

「熱っ！！」

陽の手のひらからハサミが零れ落ちた。落ちたハサミは時間が経つにつれ、徐々に赤みを失っていった。

「お、すまん。加減が難しくてな。今のは七種類ある内の紅色シートの赤外線照射能力だ。全七種類あるから大方虹にでも例えたんだろっ」

「シ、シート？ 虹？」

「ああ。太陽は異なった光を照射している。虹はそれを視覚化したものなんだが、コイツはそれを応用して如何なる光をも分解して意図的に操れるんだ」

「そんな事が可能なのかい！？」

「ああ。全く……世界の論理【ロジック】とは、これほどふさわしい名もない。光を操れるとは、それ即ち光によって存在している地球を、牛耳る事と同義といえるんだからな」

陽は呆然としている。いや、完全に呆然としているわけではない。正確には、その表情に幾つかの感情が混在している為、動きを止めているかのようだ。様々な色が混ざりあうがために黒く染まった純白のキャンパスのように。

創屋は友の今まで見たことがない様子に訝しげに眉を寄せた。

「どうした？」

陽はいつも通りの笑みで、いつも通りの声で、頼み事をした。

「あ、ああ、大丈夫。なんでもないよ。それより悪いんだけどね、創屋。その世界の論理【ロジック】とあの本をくれないかい？一度父さんの会社で調べてみたいんだよ」

おかしいと創屋は感じた。自分は何事よりも論理的思考を尊重してきた。直感的思考に頼らないことは零ではなかったが大概、勘に頼ったら悪い結果が待っていた。だから多用することはなかったのだが、今回だけは安易にコレをあげることに不安感が否めないと創屋は直感したのである。

「……あのな、それより先程から様子がおかしいぞ。いきなりハサミを持ったり思いつめた表情をしたり。何かあるなら言え。友達だろっ？」

今度は陽が驚愕した表情を見せた。だが、創屋と違って理由は明確らしく表情に迷走の色は見えない。先程からの行動、表情から単純でありながら深遠な理由である事は、創屋にも容易に想像できた。

「友達……」

表情は一瞬にして笑みへと移行した。それはいつもの自尊心から来る笑みではなく、人を嘲る際のもの。即ち、陽が一度たりとも見せたことのない笑みだった。

「そうかい。僕、君に対して微塵も友情を感じてないよ。人殺しの

息子に感じる程お人好しでもないんでね。それより友達なんてきれいな言葉を君が言わないでくれるかな。虫酸が走んだよ機械ヲタが」

氾濫した川のように急激になだれかかる罵詈雑言。創屋は全て受けた。その鉄砲水のごとき一言一句に貫かれ、創屋は案山子のように動きを止めた。

そんな様子の創屋を一瞥しながら、陽は世界の論理【ロジック】をその手から奪おうとした。が、いきなり創屋が左手で陽の右腕を掴んだ。

「……待て。人殺しの息子だと？ どういうことが説明しろ」

「君が知る必要はないよ。それよりさつさとくれないかい？ 君なんかが持つよりも僕らが持つ方が安全だ」

「僕ら、だと？ お前の他に誰がこれを欲しているんだ」

笑い顔は一瞬にして、見たものを凍り付かせるほどの醜さと、恐ろしさを湛えた顔に歪められた。

「だから知る必要はないんだよ。あー、もう。いい加減黙れよ！ さつさと寄越せ。それさえあればっ！」

創屋がその発言に驚嘆するのも束の間、陽は先程のハサミを再度握り直してただ振るった。その一振りにはどこにどう当てるかなどという考えは微塵もないだろう。ただ一つの思いを体に宿して。思うがままにハサミは振り下ろされた。

創屋は至近距離からの攻撃に辛うじて回避するも、完全には無理だった。頬をハサミの刃先が走り、血が滴る。創屋は深い斬撃のあまりの痛みに思わず手の力を緩めてしまった。

「や、やった、取ったぞっ！」

もはや、友とも形容しがたい人間がそこにはいた。人を生き返らすなどというおおよそ不可能な事に狂氣的に笑い、傾倒し、自らの人生を歪めるのか。

そんなイカレタ道に親友が進むのは創屋にとっては何物にも代え難い苦痛だった。だからこそ彼は。

黒い腕輪を手を取った。

たった一つの信念を携えて創屋は真っ直ぐに陽を見つめ、問いを投げかけた。

「貴様^たは誰が為に生きる」

陽はその威風堂々とした様子をせせら笑い、叫んだ。

「勿論、母さんの為だけだっ！」

叫びと同時に陽は猟奇的な笑みを湛えて世界の論理【ロジック】を掲げた。陽が口を開こうとした時だった。

陽は背後の壁に叩きつけられていた。

そしてその向かい側には黒い板を腕に身に付けた創屋が構えていた。

「ならば、その決意を潰し、正気に戻すまでだ」

想いの矛先（PEARHEAD）（後書き）

いよいよ次回で序章が終わりです。1章からは週1ペースを何とかし
ても守りたいと思います。いや、誓います。

思想交錯(cross)

「な、なんだい、それは」

陽は、激しく痛む頭を抱えつつ創屋に問いを投げかけた。創屋は自らの腕に填めた漆黒の腕輪に目を落として答えた。

「それと同じだ」

創屋は、口元に微笑を浮かべつつ、再度漆黒の腕輪を掲げた。

「gale」

簡素な言葉が終わった途端、腕輪が僅かに振動した。振動したといても些細なもの。創屋の腕が動いただけなのかもしれない。だが、変化は如実に起こった。

「カハッ」

陽は何かに衝突されたかのように体をくの字に曲げた。

「な、にが、起こった……？」

疑問符は増えるばかりだ。だが、その一切は意外にも創屋の説明により消え去った。

「コイツの名は飛翔^{フラ}する狩人^{イット}。内部にて空気を超圧縮し、外に放出するだけのものだ。まあ、分かり易くいえばコンプレッサーの延長線上のような発明だな」

「ご丁寧に説明をして来た創屋に、陽は嘲笑った。あまりにも、陳腐であっけないぐらいの、力の差に。」

「ただ、それだけの、モノかい？」

創屋は静かに頷いた。その刹那、部屋に笑い声が響いた。陽が、自分が想像した通り、いや想像した以上の未来に慶びを感じずにはいられなかったが為の笑い。

「なんだいそれは！ 起死回生の手がそんなものかい！？ 滑稽でならないねえ。もっとマシな物を作っていれば良かっただろうに」

「……残念ながら、それは無理だった。俺とお前が開けた見開き2ページ分しか開かないんだ」

「なら、ご愁傷様という他ないね」

陽は創屋が身構える隙を与えないため、紫色の面を素早く傾け、叫んだ。

「死去“d i e d”せよ」

片や、創屋は反撃を避けて真横に飛び退いた。彼の背後にあった蘭がみるみるうちに枯れていき、最後には崩れ落ちた。

「フツ、光を操るなんてまるで僕のためにあるようだね、この兵器は。眉目秀麗な僕に相応しい綺麗な姿だ」

異常。ナルシストとは元来、自己陶醉の過激な人を指すが今の陽は明らかに違っている。もはや自己信仰とまで呼べるレベルだ。そし

て、信仰とは時として人に異常で多大な力を齎す。ただの凡人とでは、あまりにも、残酷なほどに、冷徹なほどに、力の差が歴然としすぎている。

陽は先の命令を連呼し、部屋のありとあらゆる物質、生命を死去へと追いやった。だが、その中でさえ創屋は笑っていた。その不適な笑みが今まで陽を嫉妬と憎悪の濁流へと誘ってきたのだとも知らずに。

「なにがおかしいんだい？」

狂氣的な笑みが一転、無表情なものへと変わった。それは陽自身にも明白に理解できた。

「いや、滑稽だと思つてな」

「何が？」

緑色の面を向けて、再び狂氣的な笑みを浮かべた。打つて変わり、創屋は呆れ顔で両手を上げた。

「これが秘める本当の力を理解できないのが滑稽でならないんだよ…… pressure」

その一言で凶徒は地に平伏した。否、そうせざる負えなかった。その圧力が凄まじ過ぎたのだ。一瞬でも気を緩めてしまえば落ちかねない程に。

「一つ勘違いしているようだから正すが、何もこれだけがページに描かれていたわけではない。もう、一つ。発明が描かれていたのだ」

部屋の至る所から先程の六角形の形をしたタイルのような物が数十枚、ゆっくりと浮上してきた。

「名は六角飛翔^{ペンタグラム}野。用途は幾通りも存在する」

瞬間的に陽は気付いた。呼吸が出来ない。先程の圧倒的なまでの圧力がずっと続いているのだ。試しに声を出そうとするが、やはり出ず、そればかりか意識が遠のいてゆく。その最中、創屋の音が頭上から聞こえてきた。

「最近何があったのかは知らないが、言ってくれもしないのか。こちらとしては、ただただ殺意を向けられるのではどうしようもないが」

その一言に少なからず気持ちが揺いだ。自分は一体何をしているのかと。創屋を殺さずとも父の無念を言いさえすればきつとくれるはずだ。そうさ、なんていったって創屋は僕の友達なんだから。

創屋に謝罪と感謝の旨を伝えようと頭を上げた。その瞬間^{とき}だった。頭の中が殺意で満たされた。創屋は陽を、悲しそうな瞳で見つめ、見下ろしていたのだ。美しい自分を。その思いを。全てあたかも見透かしたかのように。

瞬間、自分でも分からないほどの力が出ていた。見ると手元の緑色の面が自分へと向いて輝いていた。自分にはコイツがある。この、^{しんねん}論理が。

突発的に颯爽と駆け出し、創屋の持つ本に手を掛け、力の限り叫んだ。このふざけた世界を吹き飛ばさんばかりの叫び声を。

「陽光よ、コイツに断罪の雨を！！」

^{ロジック}世界ノ論理が目を覆わんばかりの、目映い光を灯した。

その2秒後、創屋の部屋が吹き飛んだ。

気が付いた時、陽は天井を見上げていた。創屋宅の天井ではなく、病院らしき天井。不意に横を見ると父をはじめとした数人の男女が軒を連ねていた。

「ああ、ごめんよ。父さん」

「何故謝るんだい、息子よ」

照は優しく陽の頬を撫でながら語りかけた。

「しくじったみたいだ。将来、創屋は椰子貴のようになって思っ
てね。殺そうとしたんだけど、彼奴をやれなかった。あの爆風の中、
逃げるのを見たんだ、ごめんよ。本当にごめんよ」

悲しい。などというひ弱な感情ではない。感涙に咽^{むせ}ぶ、などとい
う甘い感情でもない。それはさながら、全身を刃物で切り刻んだ上
に塩を練り込むような激痛が陽を襲った。愛する者を自分の手で守
れなかったのだ。救えなかったのだ。当然の事である。

だが、その中でさえ照は微笑んでいた。そして、背後から紙の束
を――

「そ、それはっ！」

見間違っただろうか。いや、間違える筈がない。それは陽が命を張

つてまで手に入れようとしたもの。

「ミネルヴァ フクロウ女神の梟、その後半部分だ。ちぎれてしまったがまだ使えるようだ。良くやったな」

陽は本を手にとり中をみた。相も変わらず真っ白だが、手触りはまさしくその本そのものだった。

「さて、ではいよいよ——」

照の声がしたので顔を上げると、年も変わらぬような三人が陽の真正面に佇んでいた。

「報復の開始だ」

それは正義の旗を掲げた反撃の狼煙か。はたまた朱に染まった虐殺へのプロローグか。

その式の回答を出すにはまだ早い。今はまだ証明は始まったばかりである。未長くお付き合い願おう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2803g/>

Minerva・Books

2011年1月16日02時01分発行